Ｖ戦士

徳島県バレーボール協会中学校専門部便り　第５８号

人生とバレーボール

徳島県バレーボール協会　　理事長　　伊達　　勉

日頃は、徳島県バレーボール協会の諸事業に対しまして、ご理解・ご支援を賜っておりますことに厚くお礼申し上げます。

さて、私がバレーボールに接したのは、高校２年生の時に友人の誘いがきっかけでした。その後、練習を重ねましたが、それほど有名な高校でなかったので続きました。地元の体協から多智花杯などに出場させていただきました。

その後、市役所チームに所属して実業団の大会に参加し、北海道旭川大会・岡山県水島大会・福島県福島大会の全国大会に出場しました。地元のママさんチームのコーチをしながら、地元ジュニアチームの指導も行いました。徳島市内のチームのレベルアップを目的に指導者を集めて毎日曜日にリーグ戦を行い、どうすれば徳島市内チームの力を付けることができるか監督たちと議論をしました。その時に、福岡県博多市での小学生の指導者研修会などにも参加しました。また、徳島県でジュニアのトップチームであり全国優勝した桑島ＪＶＣから１セット先取できたことを思い出します。

昭和６０年から県協会の理事をはじめ常務理事・一般実業団専門部長・副理事長と現在の理事長と歴任させていただきました。また、（公益財団法人）日本バレーボール協会四国ブロック執行役員と色々な経験をさせていただきました。長年に渡り審判を振出に競技運営・事務局と忙しい毎日でしたが、バレーボールが好きと言ってしまえばそれまでですが、家庭の理解を得て御世話をさせていただいてると思います。役員をされている方々も同じ考えでないかと思いますが、だんだんと、活動運営が難しくなっているのではと思われます。バレーボール愛好家が多く参加していただければ今後の協会運営も期待が持てるのではないでしょうか。

今般少子化時代ですが、バレーボール競技人口の底辺の拡大をし競技力の向上を図るために、選手の一貫指導事業を推進し、「愛情と情熱」を持って、選手一人ひとりを大切にする指導者を育成しなければなりません。スポーツの主役はあくまでもプレーヤーで、スポーツ指導者の役割はその活動を支えることであり、プレーヤーがスポーツ活動に何を望んでいるかを理解し、個性や長所をのばして、技術的、精神的な成長を促すなど、常にプレーヤーのことを中心に考えた指導を心がけ、発育・発達段階や技能のレベルに応じた指導の内容・方法を工夫することが重要です。そして、プレーヤーの健康状態に注意を払い、怪我や病気を起こさないよう安全に配慮し、さらに、プレーヤーの人権や尊厳、人格を尊重し、誰に対しても公平に接することが大事です。そうすれば、プレーヤーも指導者に対して信頼を寄せ、尊敬の気持ちを持つようになります。指導者と

プレーヤーの間に相互尊敬の関係を築くことお願います。
　最後になりますが、中学校専門部の今後ますますの発展を祈念しまして、文章を閉じさせていただきます。

昭和から平成・令和へ

高橋 利明

その１５　～さわやか杯、そして入院。再び、ＪＯＣジュニアオリンピックカップ大会～

　１９８７年に第１回大会が行われ、当初は日本コカ・コーラボトラーズが特別協賛していました。第１１回大会までを『さわやか杯』、第１２回－１４回大会を『アクエリアスカップ』、第１５回大会以降を『ＪＯＣジュニアオリンピックカップ』と称して開催されています。
　第１回のとき私は、徳島県バレーボール協会に所属はしていなかったこともあり、興味・関心はありませんでした。しかし、その年度において県優勝したチームの監督が選抜チームの監督ではないのは何故か、大会にアグレッシブでもない、パッションもない方がスタッフに入っているのか？疑問に感じて、第４回大会のときにそう発言すると、男子のマネージャーとなってしまいました。それから第８回大会まで男子のスタッフとして大会に参加しました。当時は、バブル経済の時期であったため、スタッフ・選手へジャージ・シューズ・大会に関する全国中の新聞記事を載せた冊子などたくさんいただきました。また、東四国国体前ということもあり、選手（保護者）への負担は、事実上ありませんでした。しかし、東四国国体も終わり、バブルも崩壊していくと、そういう訳にいかなくなってしまったのも事実でした。第９回大会は男女両チームのお世話をすることになりました。（というのも北島中学校から南部中学校へ異動したため、男子には北島中学校男子バレー部、女子には南部中学校女子バレー部の教えた子たちがメンバーに入っていたため、どっちもつかず状態でした）第１０回大会からは女子のスタッフとして活動しました。

　第１１回大会は女子監督として頑張ることになりました。しかし、運のない私に、１１月２４日午前８時３０分頃にとんでもないことが起きました。それは、校内の階段を上ろうとしたとき、右腰に激痛が走りました。左腰は、ぎっくり腰で常に痛い状態でしたが、それとは全く違うしかもレベルの高い痛みが走りました。脂汗をかきながら何とか４階の教室に行き、朝の学活を行い、１時間目の授業に臨みました。授業が始まって約１０分後に私は、「すまんけど、腰が痛いので帰る。」そこから、約１週間ほど治療のためあちこちに行くのですが、治りません。整形外科に行ったところで湿布をもらって貼っておくのが関の山と思っていましたが、ついに行くことになりました。小松島病院でＭＲＩをとって医者から言われた言葉が、「綺麗な椎間板ヘルニアですね。」と言われ，ちょっとムッとなりましたが、「治りますか？」の質問に「治りません。安静が一番です。・・・治すとしたら手術しかありません。手術の方法は２通りあります。１つは切開して飛び出た軟骨をとる方法があります。この場合、もしかしたら神経を切る

可能性も出てくるので、体のどこかにおいて障がいをもたらす場合があります。また、完治するまでの約６ヶ月は寝たきりになるでしょう。もう１つは、内視鏡による手術です。この方法だと体に負担は切開するよりもないためいいと思います。その名医が、我が院にこの前までいましたが、今はいません。その先生に頼むとしたら、数ヶ月待ちになると思います。・・・とりあえず，安静にするため入院しましょう。」ということで入院することになりました。選抜チームの監督として情けなく、今後どうしようかという思いでした。私は、練習がある土・日曜日に顔を出すようにしました。そして、保護者が布団を用意してくれるという状態でした。本大会の大阪府立体育会館での練習のときは何とか立ち上がった状態でしたが、何もできませんでした。ボールが転がってきたとき、ボールを捕ろうとしましたができませんでした。そのとき、「人生、終わったなあ。」と心の底から思いました。このときの大会は、予選リーグがなく，完全トーナメント制でした。結果は負けてしまいましたが、これからどう生きていくかという思いでいっぱいでした。結局、１２・１月の２ヶ月間病休をとることになりました。

新しい年度を迎えた４月、吉成忠生先生（当時、徳商女子バレー部監督）から電話がかかってきました。「昨日の関西テレビのニュース、見たか！？すぐに治るらしいぞ！行ってこい！」ということで、５月京都の病院へ行くことになりました。ＭＲＩの画像を持って行ったため，即座にそこの医師から「これならすぐに治ります。」という神様の言葉にも聞こえる話でした。「いつ手術になりますか？」「わかりません。テレビで紹介され、患者が殺到したため、そのときになったら連絡します。・・・約１年後だと思ってください。」という再び地獄に落とされたような返事が返ってきました。「もっと早くにはなりませんか？」「・・・そうですね。同じ治療法をしているのが、大阪の高槻にあります。そちらに来られますか？」「はい。・・・そこだったら、いつになりますか？」「そこは、テレビで紹介されていないため６月にはできます。」ということで、大阪府高槻市になる島本病院で治すことになりました。

治す方法は、ＰＬＤＤという治療法です。当時としては最新の治療法で、レーザーによって脊椎から出た軟骨内を焼き切り、なかを空洞にすることによって自然治癒でその空洞がふさがるようにする。そうすることによって，飛び出た軟骨が中に収まり、軟骨が神経を刺激しなくなるため、痛みがなくなるというものでした。手術と言っても軽微なものだろうと高を括（くく）っていました。ところが、実際は「地獄に落ちる」か「死刑執行」になるようなものでした。まずは、レーザーを通すための管を挿入するための部分麻酔を脊髄へ行います。（これがまた痛い）次にその後、管を通す。その管の中にレーザーが出てくる管を入れる。医師からは、「少しずつレーザーの温度を上げていきます。１２００度から１５００度くらいになります。すると、急に熱さのための痛さがなくなります。それは、軟骨内が空洞になったことを意味します。それで、手術は終わりです。・・・注意事項として、手術台の縁を持たないようにしてください。手術台が動いて場合によったら指が飛びますから。ですから、このタオルを握りしめておいた方がいいでしょう。」ということでした。

「それでは、始めます！」スイッチが入ると，１秒も経たないうちに汗が湧き出てきました。「うわ、あー！」下半身が火葬場状態になりました。骨の焼ける臭い。何故、手術台が動いて指がなくなるかもしれないというのがわかりました。タオルでは、柔ら

かすぎてその痛みに耐えることができないので、申し訳ないが、隣にいた女性の看護師の腕をつかんで握りしめました。看護師には申し訳なかったが、痛みを辛抱する方法はそれしかありませんでした。「一度休憩しましょう。」８００度あった状態を少々下げる。ホッとする瞬間。そして、「再び，始めます！」「あ～！」助手の医師は温度を淡々と言う。「８００・・・９００・・・１０００・・・１１００・・・１２００・・・」「っん！？痛みが急になくなりました！」「わかりました。手術は終わりです。」スイッチを切る。管を抜く。別の看護師が、「そしたらこの車いすに乗ってください。」私は、「（熱さによる）痛さで動くことができません。」すると看護師は、「みなさんそうしてもらっています。早くしてください。」何という冷たさか！必死になって手術台から車いすに飛び下りるように座り看護師は､病室へ小走りで運んでいく｡｢痛い～～！｣叫び続ける自分。１０人部屋の病室にたどり着きました。再び看護師が、「ベットに寝てください！」「痛くて、立ち上がることができません！」「まあ、なんてわがままな患者！早く飛び移ってください！」私は一か八かで飛び移る。成功！看護師は車いすを押しながら病室から出て行きました｡するとすぐに､４～５名の患者が｢大丈夫ですか？｣と心配そうによってきました。私は、「これって，本当に治るんですか？」「大丈夫だと思いますよ！毎日、３~４人やって失敗は私たちだけですから・・・私たちは，もう一度手術するために入院しているんですよ！」「（ぎゃ～）それじゃ、ここは失敗作部屋なんですか！？」「まあ、そうかもしれんけど，成功した人もいたから一概にそうは言えません。（笑）」とんでもないところにやって来たもんだ。一体、これからどうなるんだ！

翌日、１１時頃に診察が始まりました。「どうですか？・・・ここは（痛みが）ありますか？・・・ここは？」私は問われる度に、「痛いです！」と答えたが、「それじゃ、退院です。昼食をとってから帰ってください。」「（そんな馬鹿な。まだ手術の痛みがあるというのに帰れ！というのか！！）」仕方なく、阪急京都線高槻市駅から阪急梅田駅・地下鉄御堂筋線梅田駅から難波駅へ。そして、南海本線難波駅から和歌山港駅経由小松島港（当時は小松島港から発着していた）に到着。死ぬ思いで帰ってきました。しかし、そこから車を運転し帰宅するのも死ぬ思いでした。結局、１週間ほど学校を休むことになりました。ＰＬＤＤ治療のうたいい文句としては、「手術した翌日には完治！」とあったのだが。

当時、女子監督は３年で交代でした。（男子監督は期間を設けていませんでした）第１２回大会のスタッフを決める中学校専門部会で女子監督は私を前提に進みました。私は、「ここでまた昨年と同じようなことになったら迷惑をかけるので，今回は清水（俊宏）先生にお願いしたい。」といことで了解を得て、再び１２月、入院することにしました。それは，胆嚢のポリープを摘出するためでした。毎年、９月（季節変わり）になると授業中、痛みに耐えかねてうずくまることが多かったので、さわやか杯のスタッフをしないこの時期が一番のチャンスだと思い、手術をすることにしました。約１年のうちに３回入院することになりました。

第１３回大会は、再び女子の監督になりましたが、専門部長だったため反対もされました。というのも当時、生田豊徳島県バレーボール協会会長が、「専門部長は、総監督となって、男女両方の世話をする。」としていたからでした。しかし、「今年が一応、

監督３年目。どうしてもやりたい。」ということでやることになりました。その年の７月、東京で全国専門委員長会議がありました。日本バレーボール協会から（実は、日本中体連バレーボール競技の専門委員長会議であったが、日本中体連主催でないと全国から集めることができないから）「今年のさわやか杯男女ベスト４のチームの監督は、３月の春休みにヨーロッパへ視察に行ってもらう。」という話がありましたが、練習試合をすると負けることはなかったけれど、自分には関係のない話だと思っていました。当時、絶頂のチームが四天王寺中学校で大阪南・北にその選手が別れていましたが、圧勝した。唯一負けたのが宮城でした。（スタッフに佐藤伊知子・元全日本選手）１１月下旬、保護者が「後は九州だけやな。・・・九州、特に大分は強いけんなあ！」抽選の結果、大分と群馬のグループに入ってしまいました。

大分との試合は、大阪府立体育会館サブコート。「向こう側のコートをとるように！」と指示をし、徳島が早くコートをとったが、それより先に大分が練習をし始めました。「やられた。仕方がない。手前のコートで練習を始める。」試合が始まりました。常にリードしているのは，徳島。しかし、何故か追い詰められているような試合展開。先にタイムアウトをとる。そして、リードを広げる。ようやく大分がタイムアウトをとり、点差が縮まる。徳島がまた先にタイムアウトをとる。そして、１４－１４に並んでしまう。ここで、サーブ権は徳島。しかし、サーブが一番不安定な選手がサービスゾーンへ行く。「よし！ここだ！」とっておきの選手にメンバーチェンジをする。「これで、どうだ！・・・よっしゃ！・・・えっ！？何が起こった？？？・・・。」ピンチサーバーの選手がエンドラインを踏んでサーブを打っていたのでした。コートに入っていた選手もそうでない選手もスタッフも唖然。第１セット大逆転１４－１６で負けました。第２セットもその影響で６－１５で負けました。試合後、読売新聞の記者から試合のことを聞いてくるが、とにかく答える余地なしでした。群馬にもその影響でいい試合とはならなかったが、何とか２－０で勝てました。決勝トーナメントには、３チーム中１チームしか出場できないため、The End　諦めきれぬ試合となってしまいました。大分は、ベスト４。何とも言えませんでした。

翌年から、総監督として、２年努めましたが・・・全く面白くありませんでした。

ＪＯＣジュニアオリンピックカップはそれ以降、関係のないものだと思っていた。第３０回大会のとき男子監督に適任者がいないため、「私がやろうか？」といったが、仙田継治先生（当時、県専門部長）から「（年齢的なことを考えると）先生にさせるわけにはいきません。」ということだった。しかし、第３１回大会になると、仙田先生から「やっぱり、男子の監督をやって！」と言われた。私としては昨年やる気はあったが、一旦断られたため気持ちは全くなかった。そのため、断りましたが、どうしてもということで重い腰を上げて第３２回大会・第３３回大会の監督をすることになりました。